

ば料簡は略料簡、釈以後の成立ということになる。あるいはそうかもしれない。しかし四疏の内容を考察すれば先に示す如き順序が考えられる。そこでこの部分は後人の附加したものと考えられないだろうか。もしそうだとすれば料簡↓略料簡↓釈の順序も肯定されるのではないか。

註

- 1、八木昊恵『恵心教学の基礎的研究』（永田文昌堂、昭和三十七年）六三五頁。
- 2、坪井俊映『法然浄土教の研究』（隆文館、昭和五十七年）、一九〇―一九一頁。
- 3、同、二〇五頁。
- 4、阿川貫達「元祖の著及び法語に現われたる恵心先徳」、新『浄土学』四卷（大東出版、昭和五十五年）、二九〇頁。
- 5、詳細は拙論「法然上人の往生要集観(2)―その正意をめぐって―」『竹中信常博士頌寿論集』（昭和五十九年発行予定）参照。
- 6、要集における『観経疏』からの引例については、坪井俊映『前掲書』七八―七九頁参照。
- 7、坪井俊映氏はこの文を後人の附加したものである。『前掲書』一八五頁。
- 8、末木文美士「源空の『往生要集』釈書―その撰述前後をめぐって―」、『日本印度学仏教学研究』四七号、（昭和五十年十二月）一四二頁。ここでも註要↓料簡（略料簡）↓釈の考えが要約的に披歴されている。

むすび

註要・料簡・略料簡・積の四疏の關係について、いくつかの角度から考察して来たのであるが、それによれば註要↓料簡↓略料簡↓積の成立順序が想定される。ここではその要点のみをあげてまとめよう。

註要が最初のもとのされるのは、次の点からである。

- 1、他三疏に比べて記述の仕方が全体として余りよくまとまっていない。(六・七・八・九)
 - 2、「開合」に関連して、註要から積への流れが見られる。(二)
 - 3、非正意説がない。(四)
 - 4、要集の正意が七種助念にとどまっていて専修念仏の考えは他三疏程明白ではない。(五)
 - 5、觀察門に関して、註要での説明は長く積は註要を背景とした一種の結論とみなされる。(六)
 - 6、道綽善導への関心が希薄である。(九)
- 以上の点から註要は初期のものであり、多分に草稿的なものと思われる。

次に料簡と略料簡についてであるが、この両者はほぼ同じである。主に異なる点は二点ある。一つは総結要行の私積の問題で、料簡は広積、略料簡は略積を用いている。まず広積は要集十門に則する解釈法である。これは略積以前の成立であることを示唆している。

(三参照)そしてこれは註要にも見られるが、註要と料簡との異り

は善導の有無である。善導が註要にはなく料簡には明白に出ている。

このことから料簡は註要の後の成立であることが想定される。かくの如く広積によって註要と料簡の共通点が考えられ、善導の有無によってその前後が予想される。また略積は略料簡に見られるもので、註要、料簡にはない別な解釈法である。この略積には法然の思想が広積よりも一層明白に現われている。(即ち要集十門中心から七法中心への移行が見られる。)故にここには料簡↓略料簡の流れが見られる。料簡と略料簡との相異の第二点は非正意説に関するものである。料簡では「正意にあらざるか」と疑問(仮定)的表現になっているのに対し略料簡では「正意にあらざるなり」と断定的になっている。そしてこの断定的表現は積においても見られるのである。さらにまたこの非正意説は略料簡では略積・非正意説の順になっているが、この形は積においても同じである。これらのことから料簡↓略料簡↓積の順序が想定される。

積は四疏中最もよく整ったもので、料簡、略料簡の記述をほぼ同文で含み、さらに多くの記述を含んでいる。(積にのみあるものとしては、①大意、②積名中「往生」「集」に関するもの、③入文解積、この中の「開合」の考えは註要にもある。④広略要の中、広に関する部分)

以上のことから、註要↓料簡↓略料簡↓積の成立順序が想定されるのである。しかしここに一つ問題がある。それは料簡末尾の文である。「私にいわく、この抄、略料簡と同じ、但し文少し広し。而してその広文全く要集積に同じ矣。」(昭法全、一四頁)これによれ

う一つの考えは、この12の文だけは書写の過程で付加されたものではないか、原文にはこの部分は無かったのではないかということである。しかしこのことについては今のところ文献的に証拠はない。

さて道綽善導をめぐって要集末疏四書について見るに、まず詮要では善導に関しては専雑二修の文、三心、四修に関する文があげてあるが、中心は専雑二修の文で、三心、四修に関するものは専雑二修の文の説明として用いられているものである。専雑二修の文は要集にあるもので、四疏共通に引用されているものである。善導への志向がここに見られる。しかし要集助念仏説(引文11)に関連して見るとき、詮要には要集の名のみで善導の名はない。この点料簡等に比べて善導への関心は今一つではなかったかと思われる。道綽についてはどうかというに、要集には先の善導の専雑二修の文の前に道綽の文(引文4)が引用されている。(浄金十五ノ一三八頁下)にもかかわらず詮要ではそれが省かれている。このことから見れば、詮要作製時には道綽への関心は低くかったといえよう。

料簡にはまず善導に関するものが五文ある。(引文1678)とくに引文11は総結要行の広釈に属するものと考えられるが、この広釈は詮要にも見られる。しかしこの詮要では「今この集の意は助念仏を以て決定往生業という哉」とのみあって、引文11に見る如く「但し善導和尚の意は然らざるか」とはない。即ち詮要では善導について触れていないが、料簡でははっきり善導に言及している。このことは料簡は詮要に比べて善導への関心がより一層明白になって

いることを示すといえる。つぎに道綽については、要集(往生階位)引用の文(引文4)があげてあるが、私釈にはその名が見えない。これは詮要がこの部分を省略したのに比べれば道綽への関心はそれよりはあったものと思われる。しかしいずれにしても私釈にその名がないことは、道綽への関心がまだ充分ではなかったと思われる。略料簡には善導に関して四つの文がある。(引文1678)これは料簡に見えるものと同じである。(料簡に見える引文11は略料簡にはない。これは引文11が総結要行の広釈に属することを示すものといえる。道綽については料簡と同じである。

釈には引文1479101112がある。この内引文1は他三疏に共通、引文4と7は略料簡、料簡と同じ、但し引文7における「彼師」は善導だけか道綽・善導の二師か不明であるが文脈から見れば二師になることになる。引文11は料簡にはあるが詮要、略料簡にはない。引文91012は釈のみにあるものである。引文910は略料簡、料簡にも類似したものがあつた(引文68)が、両者の違いは、釈には善導の他に道綽の名がはっきりと示されていることである。この点は道綽への関心が他三疏に比べて一層明白になったことを示すものである。引文には先にも触れた如く、この釈が他三疏より後の成立であることを一層明白に示すものである。

以上道綽善導をめぐって、この四疏の関係を見るに、そこには詮要、料簡、略料簡、釈の順序に従っての展開の跡を見ることができないのではないか。

しかし註要では要集の念仏についてのみ触れ、善導（の念仏）については触れていないのである。

12は釈にのみ見えるものである。この文の特徴は道綽の『安楽集』による聖浄二門、善導の『観経疏』があげられていることである。

ここでは『観経疏』のどの部分であるかは不明であるが、一応『選択集』に引用されている部分だと考えてみると、この12の文は法然上人の要集観に重要な意味をもつものと考えられる。この点をさらに考えてみよう。

まず要集における『安楽集』（及び道綽）、『観経疏』（及び善導）の引用状況を見てみよう。まず『安楽集』について見ると次の図の

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	引用名
道綽 和尙 安楽集	綽和尙 安楽集	安楽集	安楽集	綽和尙 安楽集	綽和尙 安楽集	綽和尙 安楽集	道綽等諸師	綽禪師	綽法師	安楽集	綽和尙	綽禪師	安楽集	安楽集	
上下	上	上	上	上	上	下	上	上	上	上	上	上	上	上	安楽集ノ巻浄全一ノ頁
673	687 下	687 下	686 上下	687 下	688 上	690 上	677 上	676 下	676 下	673 下	688 上下	688 上	680 上		往生要集ノ門浄全十五ノ頁
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	七	六	六	五	四	
154 下	144 下	144 上	143 下	142 上	140 下	138 下	136 下	134 上	133 下	120 上	113 上	110 上	90 上	69 下	

如くである。

以上十五の引文があげられるが、聖浄二門に関する文（『安楽集』上―浄全一ノ六九二頁）はどこにも見当たらない。次に『観経疏』の引用状況を図示すると次の通りである。

番	引用文	『観経疏』	浄全二ノ頁	『往生要集』	浄全十五ノ頁
4	善導禪師	文義分	七〇八	十	138 上
3	有云	散善義	五四〇五六	十	134 下
2	禪師	散善義	七〇八	五	89 下
1	有云	文義分	七〇八	四	78 上

以上四文が引用されているが、『選択集』に見られるような引文は見当たらない。⁽⁶⁾

以上のことからこの12にあげているような『安楽集』からの聖浄二門の考え、善導の『観経疏』についての考えは、要集そのものからでて来たものとは云い難い。これは他の別なところから導き出されたものではないかと思われる。即ちこの釈の12の文は、聖浄二門の考えが確立し、『観経疏』の位置が明白になった後に書かれたものではないかと想定される。或はまた別な見方をすれば、聖浄二門判、『観経疏』の重要性が上人の頭の中に莫然とあって、この考えがさらに後に三部経釈、逆修説法、選択集と進むにつれてその重要な位置を占めるに至るといふ考えも可能である。この場合には釈の位置は三部経釈等より以前のものと考えられうる。そして聖浄二門、『観経疏』が重要な位置を占める初期のものと理解される。も

信心不_レ相続_一余念間故。此三不_レ相続_一者、不_レ能_レ往生_一。若具_二三心_一不_レ往生_一者、無_レ有_二是_レ是_レ。

5、恵心詮要引_二用善導專雜二修_一決_二往生得否_一而、嫌_二雜修雜行_一、勸_二專修_一之志、以_レ之可_レ之。

6、恵心尽_レ理定_二往生得否_一以_二善導和尚專修雜行文_一為_二指南_一也。

7、処々多引_二用於彼師釈_一可_レ見。

8、然則用_二恵心_一之輩、必可_レ帰_二善導_一哉。

9、恵心雖_レ尽_レ理、定_二往生得否_一、以_二道綽善導_一所_レ為_二指南_一也。

10、然則用_二恵心_一之輩必可_レ帰_二善導道綽_一也。

11、此要集意、以_二助念仏_一為_二決定業歟。但善導和尚意不_レ然歟。

12、依_レ之先披_二綽禪師安樂集_一、覽_レ之分_二聖道淨土二門_一、釈_二仏教_一也。次善導觀經疏可_レ見_レ之矣。

1は善導の『往生礼讚』（浄全四ノ三五六頁下）の略抄である。

これは古本四末疏に共通して見える。（昭法全、七、十四、十七、二十六頁）。2も同じく『往生礼讚』序（浄全四ノ三四頁下）に

あるもので、これは三心の説明として詮要にのみ引用されているものである。（昭法全、八頁）。3も同じく『往生礼讚』序（浄全四・三五五頁下）からのもので、これは四修の説明として詮要のみに引用されている。（昭法全、八頁）。詮要には「如上」の解釈として礼拝等の五念門、至誠心等の三心、長時修等の四修を含むことを示すために『往生礼讚』からの文を引用している。従ってここでは三心（引文2）四修（引文3）の他に五念門が省略されていることを知

るべきである。それ故、引文2・3を一つにして『往生礼讚』序の文とすることができる。4は道綽の『安樂集』（浄全一ノ六九〇頁上）からの取意抄で、これは詮要を除く他三疏に共通して見えるものである。以上1から4までの中、1と4は「要集」第十大門第二往生階位からの引文である。

569は共通した主題についてのものである。5は詮要、6は略料簡及び料簡、9は釈に見える文である。恵心が往生の得否を決定する根拠を求める時、56は善導の專雜二修の文をもって示すとすが、9では專雜二修の文は消え、善導だけでなく道綽をも指南とすると示している。これは善導だけでなく、道綽への志向が一層はつきりしていることを示すものである。7は詮要には見えず、他三疏に共通してある文である。

810は恵心を用いるものが帰する師について示すものである。このような指示は詮要にはない。8は略料簡と料簡、10は釈にあるものである。8は帰する師として善導のみをあげるが、10では善導と道綽をあげている。ここにも善導のみならず道綽への関心の深まりが見える。

11は料簡と釈にある文である。略料簡には全くないが、詮要には「今此要集意、以_二助念仏_一、云_二決定往生業_一哉」（昭法全、一〇頁）とある。この11には二つのことが含まれている。一つは助念仏と但念仏、他は要集の念仏と善導の念仏の相異。11の文の前には三疏共に念仏乃至念仏往生に但念仏と助念仏があることを示している。そして念仏を要集と善導に配当しようとするのがこの11の文である。

六、觀察門

釈では広略要の中、要を論ずる部分にあげてあり、註要では開合の中、合について論ずるところにあげてある。註要では念仏一門が十門の中心であることを立証するために示されている。註要と釈における觀察門の取り扱い方を見ると、釈では念仏一行を勧進する文として原文のみがあげてあるが、註要では原文、釈文が混然となつて詳しく記されている。そしてそこでは觀念称念の問題も論じられている。(釈にはない。)この点やはり釈はいわば結論のみで、註要にはその背景となる思想が論じられているといえる。このことから註要は釈以前の成立といえよう。また料簡・略料簡では釈と同様の原文が引用され、「私に云く、これ則ちこの集の肝心也。行者よく心に留むべき也。」と結んでいるのみで私釈はない。(また觀察門は總結要行の広釈の中にも出ている。そこでは念仏を觀察門の異名とし、觀察称名―料簡・釈―、觀念と称名―註要―、の二行の中、称名をもって要とするとあげているが詳しい検討は加えられていない。)觀察門については註要ではいろいろに論じている(その一部は料簡広釈にも見える)が、他二疏では原文(一部省略はある)があげられているのみといえる。これからも註要は初期成立のものと思われる。

七、第八念仏証拠門

註要では原文は引用せず、三番問答で要点のみ示す。但し「因明直弁」についての説明は長く、他三疏には見えないものである。こ

れも註要が草稿的役割を演ずることを示すもので、これが後に整理されて他三疏に見る如き形をとっているといえる。

略料簡・料簡・釈は原文全体を引用し私釈として三番問答六義をあげている。その記述は三疏ほぼ同じである。

八、往生階位(第十大門第二)

註要では他三疏(この三疏は共に同じ部分を引用している)に比べて長く、中に三ヶ所省略がなされている。(その一つに道綽の文がある。)このことはこの文の中心思想がまだ充分固っていないかったことを示すものといえよう。略料簡・料簡・釈では道綽の文も含めて引用している。これも註要が初期成立のものであることを示しているといえよう。

九、道綽善導をめぐって

まず両師に関する引文をあげよう。

- 1、導和尚云。若能如_レ上念々相續畢命為_レ期者、十即十生、百即百生、若欲_レ捨_レ專修_レ雜_レ者、百時希得_二一二_一、千時希得_二三三五_一、
- 2、往生礼讚序云。如_レ觀經說、具_二三心_一必得_二往生_一、何等為_レ三。一者至誠心、二者深心、即是真實信心。信_下知自身是具_二足煩惱_一、凡夫、善根薄少流_二三_一、界_二不_レ出_二火宅_一。
- 3、畢命為_レ期誓不_二中止_一、即是長時修。
- 4、綽和尚云、信心不_レ深、若存若亡故。信心不_レ一、不_二決定_一故。

要集の正意ではないという説である。この説は註要にはなく、他三疏にはっきりと見えるものである。まずこの説の位置関係を見てみよう。

註要	廣積	略料簡	料簡	積
	廣積 +	非正意説	略積 +	略積
		非正意説	非正意説	廣積 +
			廣積	

非正意説の位置は料簡・略料簡共にそれぞれ総結要行の私積（廣積、略積の別はあるが）の後に来ている。説き方の順序としては当然である。しかし積では略積と廣積の間に非正意説がきている。これはどう解したらよいか。まず第一に積では略積、非正意説の順になっている。これは略料簡と同じ順序によるものである。即ち略料簡の型をそのまま利用したものと考えられる。第二に積では続いて廣積があげてある。これは積がより完成したものであることを示すものといえよう。即ち総結要行に対する二つの解釈にはそれぞれの特徴があるので、二つを共に積の中を含めたものといえよう。かくしてここには略料簡から積への流れを見ることができ、それに註要（乃至料簡）からの廣積が加えられ積の記述が成立したと見ることができよう。

五、七種助念から専修念仏へ

非正意説に関連してもう一つ重要な点是要集の中心思想が七種助念から専修念仏へと変わったことである。註要には総結要行の中の第一問答の説明の後に次の如き結論がある。

情案^ラニ此問答意^ノ依^テ此要集意^ノ欲^ス遂^ニ往生^ニ人先^ハ發^シ緣事^ノ大菩提心^ニ次持^ニ菩薩十重禁戒^ニ以^テ深信至誠^ニ常稱^ニ弥陀名号^ヲ廻向發願^{スルハ}決定得^ニ往生^ニ此即此集正意也。

かくの如くここには要集の正意は七種助念であると明言されている。さらにまた註要の終りの方では、念仏往生に二つあり、一つは但念、他は助念仏であるとし、「今この集の意は助念仏を以て決定往生業という哉」としている。一応「哉」とはあるが、七種助念が要集の正意であることは濃厚である。これに対して略料簡では七種助念を明かした後「これ尚、問に准じて要否を簡ぶといえども、これは且らく助念門の意なり、この集の正意にあらず」と示している。（積も同じ。料簡には「正意にあらざるか」と疑問に付している。）これは註要の記述とは大きく異なるところである。そして続いて料簡、略料簡、積には、なぜ正意でないかが説かれている。これに関する議論は必ずしも明白ではないが、背後にある結論を見ると「一心専念すれば持戒等の助念方法は必ずしも必要ではない」というもので、つまりは一心専念の念仏を主張するのが要集の正意であるというものの様である。ここには要集の意をめぐって七種助念から専修念仏への移行が見られる。

第一と第二門は修行方便、第三と第四門は往生業因である。この中第三門は往生の要で、第四門は往生の非要である。ここには念仏と諸行が論じられている。そして念仏が往生の要行であると指摘されている。念仏と諸行は先(D)で見た如く釈にも見える。詮要では往生業の必要性(D)と念仏―諸行の問題(G)が別々に取り扱われているのに対して、釈では必要性の問題は省略され念仏―諸行の問題(D)のみを取りあげているといえよう。

Hは念仏―諸行についての引文

I、ここでは「念仏往生門」の中の五門の關係が示されている。これによれば正修門が他四門より高い位置におかれている。正修門は五門中の「要門」であり、他四門はこれを「助成する」ものである。ここには正修門と他四門との間に正助の關係があるといえよう。

ところで正修門と他四門との關係を考察すると、そこには一つの大きな変化が見える。この關係に触れるものは詮要DとI、釈Aである。詮要Dでは念仏往生門について詳しい説明がなされているが、正修門以下五門を念仏の名の下に一門として集約したことが記されている。しかし正修門と他四門との差は明白には示されていない。ところが詮要Iでは今見た如く正修門と他四門との間に正・助の關係のあることが示され、正修門が正・要門であるのに対して他四門は正修門を助成する門とされている。しかし釈Aでは、これからさらに一歩進んで正修門の中に他四門を包摂するという考えが見られる。ここには詮要には見られない大きな質的变化があるといえよう。正修門の性質が、詮要では他四門より高い位置におかれて、いわば

相対的なものとされているが、釈では他四門をその中に包摂統攝するという統攝的、絶対的なものへと変化しているのである。かくしてここにも詮要から釈への流れを見ることが出来る。なほ詮要ではこの後正修門に関する説明が続くが、これに関連しては後の「觀察門」のところで触れることとする。

三、總結要行

總結要行に関しては二種類の引用法と解釈法がなされている。一つは原文を全部(二問答)引用し私釈したもの、他は第一問答のみ引用し私釈したもの。前者を広釈、後者を略釈としよう。広釈の特徴は要集十大門(實際は二門)に則して七法が明されている点である。これは詮要、料簡、釈に見える。但し詮要には他二疏と異って、原文が始めにまとめて提示されていない。またその私釈内容は同じであるが、記述方法は料簡より釈に近い。(とくに最初の「上諸門」「所陳既多」に関するものはそうである。)略釈の特徴は七法に則して要集十大門(實際には二門)が説かれている点である。これは詮要・料簡にはなく略料簡・釈に見えるものである。これは、略料簡が撰述されたときには七法の考えが詮要・料簡のときよりも一層はっきりと確立していて、この七法に則して要集が解釈されていたことを物語るものといえよう。即ち広釈は略釈以前の成立と考えられる。

四、非正意説

非正意説というのは七種助念法が要集第五助念門の意ではあるが、

正修念仏助に助念、別時、利益、証拠の四門を撰することをあげている。これは五門についての結論である。(後に触れるが、註要には正修門に他四門を包摂するという考えは明白ではない。)

BCDEFは十門を五門に合してあげる理由でありその内容である。これらは註要にあるもので、釈に相当する部分はCとDのみである。

Bは第一厭離穢土門である。われわれが久しく生死に留まっていたのはこの迷いの世界を厭わないからである。以下内容の説明が続くが、これらのことは釈にはない。

Cは第二欣求浄土門についてである。われわれがこの迷界を厭ってもかの国を欣求しなかったら往生はできない。故にこの第二門があげられる。この欣求については二面から説かれる。一つは欣求すべき極楽の相、他はその極楽が他の浄土、即ち十方及び都率の浄土より勝れていること。前者が第二欣求浄土門であり、後者が第三極楽証拠門である。この議論を釈は表に見る如き問答形式で示している。

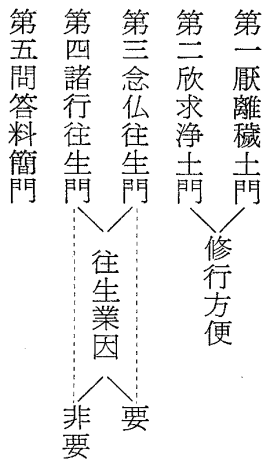
Dは五門中第三番目のものである。註要では「念仏往生(門)」、釈では「正修念仏門」と呼ぶものである。この門については註要と釈との間に微妙な違いが見える。まず註要を見るに、ここでは往生の「業」が主張されている。即ち第一門で厭離し、第二門で欣求しても、具体的な往生の「業」がなければ目的は達せられない。故にここではこの業について考えようというのである。そしてその業の中心が念仏であるというのである。そこでここでは第三「念仏往生

(門)」をまず「念仏行相」「念仏利益」「問答料簡」とし、「念仏行相」に第四正修門、第五助念門、第六別時門を配し、「念仏利益」に第七利益門、「問答料簡」に第八念仏証拠門を配して計五門としている。そしてこれらはみな念仏に約されるので一門とするという。かくの如く註要では、まず往生のための業の必要性をあげ、それが念仏であることを示し、正修以下の五門が念仏に約されたとしたのである。

これに対して釈では往生のための業の必要性、及びそれが念仏であるということなどは既知のこととして、即ち往生業は念仏であるということ的前提として、さらに一歩進めて、この念仏と諸行との関係を念頭において念仏の重要なことを主張し、「諸行に対して五門共にこれ念仏、故に亦合して一門とする」というのである。釈の以下の議論もこのことを明らかにしている。ここにも註要から釈への流れが見えるといえよう。

Eは第四諸行往生門、Fは問答料簡門である。釈には註要で見ると如き説明はない。

G、ここでは五門がまた別な角度から分類されている。まず図示しよう。



<p>F</p> <p>第五問答料簡門者此約先諸門出 不審問答解積也。故終立此門 此則十門中第十門也。此又有十、 一極樂依正乃至十助道入法也。 前三可通念仏諸行、後七但約 念仏一行也。</p>	<p>E</p> <p>第四諸行往生門者求極樂者不 必專念仏須明余行任樂欲 故次立此門。此是十門中第九 門也。此又有二、一別出諸經 文、二惣結諸行。始別明諸 經者、四十花嚴普賢願及光明阿 弥陀等顯密諸大乘出之。次惣 結諸業者委明其相即有十三。 一者財法等施乃至十三者不染利 養也。</p>	
<p>今此五門中厭離與欣求二門即修</p>		<p>是則對諸行論之。第八念仏証 掘門中所言一門者、指上正修 念仏已下四門。亦對諸行云一 門也。第九門初言念仏者、雖 無二門之寓意、指正修已下五門 云念仏也。是對諸行亦云念 仏。</p>

Aは五門をあげる部分である。詮要ではとりあえず五門の名前の
みをあげる。釈では第二欣求浄土門に第三極樂証掘門を含み、第四

<p>詮要</p> <p>一、厭離穢土 二、欣求浄土 三、念仏往生 四、諸行往生 五、問答料簡</p>	<p>釈</p> <p>一、厭離穢土門 二、欣求浄土門 三、正修念仏門 四、往生諸行門 五、問答料簡</p>	<p>I</p> <p>且就此門又有開合二義開既 立五門雖成合唯攝一門可 料簡、即正修念仏一門正要門也。 助念已下四門助成上正修一門 可得其意也。</p>		<p>H</p> <p>故序中云下依念仏一門聊集經論 要文。又念仏証掘門第二問答中 云不如下直弁往生之要多云中念 仏。又同第三問答中云明知契經 多以念仏為往生要其言唯限 念仏不通諸行而約念仏一門 可得其意也。</p>		<p>G</p> <p>行方便也。念仏與諸行二門正往 生業因也。就其業因有要與不 要一即念仏一門為要諸行一門非 要。</p>	
---	--	---	--	--	--	--	--

D	C	B
<p>第三念仏往生門者、設雖三厭レ此欣レ彼無レ其業者、不可レ成。此故正明念仏為往生業、故次立此門。</p>	<p>次問答料簡者、此指二十門中第三極樂証捩門也。此則欣求淨土論義故合撰此一門也。此又有二、一對二十方、二對二兜率。</p>	<p>厭此界、是故欣淨土一人先可厭穢土、故始立此門。此有二、一別明三厭相、二惣結三厭相、始明三厭相者、即奉六道一地獄乃至六天。次惣結三厭相者有二、廣文有二略文有二極略。</p>
<p>問曰。何故第五第六第七第八、合レ之為二門一乎。 答曰。依三正助、長時、別時、修因得果義、一往開レ之雖レ為二五門、對レ諸行、五門共是念仏、故亦合為二門一。</p>	<p>問曰十門、次第造主定可有其意、今何故未學稟庸論開合之義、有二何故耶。 答曰、第三極樂証捩門之意、即對第二欣求淨土門之疑、謂對二十方及都卒、唯偏積成西方一義、故為二門一。</p>	

	<p>就此門有二、一念仏行相、二念仏利益、三問答料簡也。始念仏行相又有三、一正修念仏、二助念方法、三別時念仏也。一正修念仏者此十門中第四門也。此又有三、一禮拜乃至五、回向也。二助念方法者此十門中第五門也。此又有レ七、一方處供具乃至七、惣結要行也。三別時念仏者此十門中第六門也。此又有レ二、尋常別行、二臨終行儀也。第二念仏利益者、此十門中第七門也。此又有レ七、一滅罪生善乃至七、惡趣利益也。第三問答料簡者、此十門中第八念仏証捩門也。此又有三番問答、凡正修已下、五門皆約念仏、故合撰二門一也。</p>	
<p>故序中云。依念仏一門、聊集經論要文。云々又第八念仏証捩門中、問曰、一切善業、各有三利益、各得往生、何故唯勸念仏一門。 第九門初謂。求極樂者、不必專念仏、須明諸行、各任中樂欲。</p>	<p>序中言二門者、惣指二部十門之中所言念仏、云依念仏一門。</p>	

法然浄土教にとって大変重要なものである。それにもかかわらず他三疏には見えない。もし釈が先の成立であれば、後に成立した他三疏に当然あげられるべきものである。それなのに他三疏には見えない。

3 非正意説が註要にはなく釈以下のものにはある。この非正意説は法然の要集観の中心思想が七種助念から専修念仏へと移行して行く過程を示すものである。これも重要な思想であるにもかかわらず註要には見えない。

この他にも詳細にわたればいくつかの問題がある。そこでここではいくつかの項目に従ってとくに古本四疏をもう一度考察し直し、その成立順序を論究してみることとする。

一、念仏一門の典故

まず念仏一門を往生の要とし、諸行を往生の要としないことを示す証拠文の引用状況を見てみよう。

引文	註	料	略	釈
1、依念仏一門聊集經論要文(序)	○	○	○	○
2、往生之業念仏為本(第五ノ七)		○	○	
3、不如下直弁往生要(多云念仏上(第八))	○	○	○	○
4、明知、契經多以念仏為往生要(第八)	○	○	○	○

四疏共通のものは123の三文であるが、とくに註要と釈は全く同

じである。料簡と略料簡は1の文がもう少し長い。即ち「……要文」の次に「披之修之易覺易行」とある。また料簡には第八門の三番問答六義もあげてある。これは他三疏には見えない。この念仏一門の典故について見ると、二つのグループに分けることができる。一つは註要と釈、他は料簡と略料簡である。

二、開合

開合の考えは註要と釈に見える。要集は開けば十門、合すれば五門である。この五門について註要では釈よりも詳しく論じている。釈は註要の重要な結論のみを簡潔に示している。この意味では釈は註要での議論を背景に成立したものと考えられる。対照表を参考にその跡を見てみよう。

	註要	釈
A	合則又不出五門、 謂一厭離穢土、 二欣求淨土 三念仏往生 四諸行往生 五問答料簡也	次合者、前十門束為五門、 謂一厭離穢土門 二欣求淨土門。此門之中即撰第三極樂証拠門。 三正修念仏門、此門中、即撰助念別時利益証拠、四門 四往生諸行門 五問答料簡也。
	今且撰五門料簡、第一厭離穢土門者、我等久留生死由未嘗	

法然の『要集』末疏成立に関して

服部正穩

はしがき

- 一、念仏一門の典拠
- 二、開合
- 三、総結要行
- 四、非正意説
- 五、七種助念から専修念仏へ
- 六、觀察門
- 七、第八念仏証拠門
- 八、往生階位
- 九、道綽善導をめぐって
むすび

はしがき

八木昊恵氏は『恵心教学の基礎的研究』において「所で法然の要集研究の在り方を四部の末註で考えると、二部の料簡は釈に合し註要は釈の再説であるから、往生要集釈を主として考察しよう。」¹と示し、註要を釈の再説としている。即ち釈が先で註要が後だとしている。その理由は述べていない。また坪井俊映氏は『法然浄土教の研究』において、「初めに上人が講述された『往生要集釈』なるも

のがあって、その部分が別行して、現存のごとき『大綱』『略料簡』『料簡』なる短篇のものが出来たと考えられるのである。²「法然が後白河法皇の仙洞において『往生要集』を講述されたときの講録（往生要集釈）を、後になって門人が、その要点と思われる部分をそれぞれ筆写して別本としたものが『往生要集大綱』、同『略料簡』、同『料簡』となったと考えられるのである。そして仙洞における講説ののちに、再び門人達に講説されたものが『註要』ではないかと考えるのである。」³と示し、八木氏同様、釈が先で註要が後であるとしている。また阿川貫達氏は註要について、「前の大綱と略料簡を合採して簡單化せるの観あり」と⁴としている。

かくの如く八木、坪井、阿川の各氏は共に釈が先で註要を含む他三疏は後の成立と主張されている。果してそうであろうか。釈を先とし他疏を後の成立とする考えにはいくつかの問題がある。

1 釈と註要とを比べると、釈の方がよくまとまっております、註要は雑然とした様相を呈している。

2 釈には道綽の聖浄二門、善導の観經疏の名が見える。これは